

天国の母へ 恩返し of 快音

初戦3安打 光星3年・長野

入学直後 がん で早過ぎる別れ



高校野球大会の初戦で、3安打の活躍を見せた八学光星の遊撃手・長野。19日、甲子園球場



八学光星の二塁側スタンドに置かれた、母尚美さんの遺影

19日、東北高校野球大会(センバツ)で初戦を戦った八学光星。遊撃手の長野(左)は、高校入学後に母尚美さん(享年50)を失った。「組織性訓練」で、お母さんへの感謝をしようと初戦に母さんへの感謝を込めて3安打を打ち、勝利に貢献。試合後、お母さんを見に来たお母さん(甲子園は楽しかった)と胸れやかな笑顔を見せた。(補完記事)【本記1面】

「プレーで感謝伝える」

小学校低学年にクラブチームに入ってから、野球漬けの日々を送ってきた長野。「お母さんと遊ぶ時間はほとんどなかったため、試合の応援に基つてくれたお父さん(父)が作ったグラタンは何よりもおいしくて、明るい性格も大好きだった。

しかし、長野が八学光星の寮に入る前、尚美さんが搬入入院することに、その入院中に病状が悪化して、長野の家族から連絡を受け、長野が家族から「今すぐ帰ってこい」と言われたのは、入学式の2日後のこと。スマートフォンも持たないまま、歩いて新幹線に飛び乗ったが、原を引寄せた瞬間に間に合わなかった。

早過ぎる母との別れに気持ちを落ち込んだ。そんな長野に、実家へ甲斐に訪れた近所の人たちが次々と話しかけてくれた。「お母さんの分も甲子園に行って恩返しするしかない」「何かあったら相談に乗るから」「支えになんか、言葉は原動力になんか」。

中学時代は後期で練習にならず、「早々起床」「早く帰るやつ」と繰り返す尚美さんと同様に、寮生活で母の回りのことを一人でするよになり、やがと気付いた。「お母さんには全部のために書いてくれてたんだ」。少年野球の監督経験がある尚美さん(53)も技術面や精神面で長野をサポート。2年春に「お母さんを守り」の中心役割を担うまで成長した。

19日の初戦は打撃で活躍。初回から打席連続で安打を打ち、好機を築いた。スタンドには尚美さんの遺

影を持った近所の人たちや仲間ら約25人が集結。尚美さんは「夢が、うれい限り。(尚美さん)喜んでいてくれる」と笑顔。長野の妻の向かいに住む平岡智子さん(46)は「尚美さんの友達みんな、左記(長野)が不安にならないように」「園」になろうとしてきた。尚美さんは「お母さん」と涙を拭いた。「甲子園で全力でプレーし、勝つこと、お母さんやお父さん、近所の人たちへ感謝を伝える最高の形だ」と涙。24日の2回戦も持ち味の鋭く、攻守で、天國の母への感謝を届ける。

東奥日報社提供

この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです